

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2020年度 佐久大学看護学部一般前期入学試験

# 『 国 語 』

(2020年 2月 3日 実施)

## 【 注 意 事 項 】

1. この試験問題の解答時間は60分です。
2. 解答用紙はすべて HB の黒鉛筆またはシャープペンシルで記入してください。
3. 試験監督者の指示に従って、この問題冊子の表紙と解答用紙の指定欄に受験番号と氏名を記入及びマークしてください。
4. メモ等には問題冊子の余白や裏面を利用してください。
5. 解答時間中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて試験監督者に知らせてください。
6. 問題を読む際、声を出したり、音を立てたりしてはいけません。
7. この問題冊子は持ち帰ってはいけません。

受験番号		氏名	
------	--	----	--



## 第1問

次の文章を読んで後の問い（問1～問9）に答えなさい。

第一次世界大戦の勃発と終結を経た一九一〇年代後半から一九二〇年代にかけて、日本社会は大きな変動の時代を迎えた。明治期までは近世以来の共同体と生活様式が、まだ色濃く残っていた。だが、大戦後は産業資本主義が急速に発展し、都市への人口集中と近代化が進んだ。その結果、都市部を中心に新しい社会階層と日常生活が形成されていった。

大戦後の近代化は、構造的なレベルで社会のあり方を変えてしまった。東京、大阪、京都、神戸、横浜、名古屋という六大都市を中心とする人口の飛躍的増加、A、生活基盤の変化と近代家族の形成、交通・情報インフラの整備、メディア産業と消費社会の台頭、郊外住宅とレジャー施設の開発、a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z aa ab ac ad ae af ag ah ai aj ak al am an ao ap aq ar as at au av aw ax ay az ba bb bc bd be bf bg bh bi bj bk bl bm bn bo bp bq br bs bt bu bv bw bx by bz ca cb cc cd ce cf cg ch ci cj ck cl cm cn co cp cq cr cs ct cu cv cw cx cy cz da db dc dd de df dg dh di dj dk dl dm dn do dp dq dr ds dt du dv dw dx dy dz ea eb ec ed ee ef eg eh ei ej ek el em en eo ep eq er es et eu ev ew ex ey ez fa fb fc fd fe ff fg fh fi fj fk fl fm fn fo fp fq fr fs ft fu fv fw fx fy fz ga gb gc gd ge gf gg gh gi gj gk gl gm gn go gp gq gr gs gt gu gv gw gx gy gz ha hb hc hd he hf hg hh hi hj hk hl hm hn ho hp hq hr hs ht hu hv hw hx hy hz ia ib ic id ie if ig ih ii ij ik il im in io ip iq ir is it iu iv iw ix iy iz ja jb jc jd je jf jg jh ji jj jk jl jm jn jo jp jq jr js jt ju jv jw jx jy jz ka kb kc kd ke kf kg kh ki kj kk kl km kn ko kp kq kr ks kt ku kv kw kx ky kz la lb lc ld le lf lg lh li lj lk ll lm ln lo lp lq lr ls lt lu lv lw lx ly lz ma mb mc md me mf mg mh mi mj mk ml mm mn mo mp mq mr ms mt mu mv mw mx my mz na nb nc nd ne nf ng nh ni nj nk nl nm nn no np nq nr ns nt nu nv nw nx ny nz oa ob oc od oe of og oh oi oj ok ol om on oo op oq or os ot ou ov ow ox oy oz pa pb pc pd pe pf pg ph pi pj pk pl pm pn po pp pq pr ps pt pu pv pw px py pz qa qb qc qd qe qf qg qh qi qj qk ql qm qn qo qp qq qr qs qt qu qv qw qx qy qz ra rb rc rd re rf rg rh ri rj rk rl rm rn ro rp rq rr rs rt ru rv rw rx ry rz sa sb sc sd se sf sg sh si sj sk sl sm sn so sp sq sr ss st su sv sw sx sy sz ta tb tc td te tf tg th ti tj tk tl tm tn to tp tq tr ts tt tu tv tw tx ty

の新住民にとって、「新しい生き方」を見極めることは、切実な問題となっていたのである。

一九二〇年代の「新しい生き方」や世相としてまず思い出すのは、モダンガイールやモダンボーイ、ジャズ、ダンス、カフェー、シガレット、エロティシズム、ナンセンスといったカタカナ語であろう。これらの新風俗は、東アジア地域に広く流行した現象でもあり、しばしば逸脱やキョウソウや頹廢というイメージを帯びていた。

その一方で、百貨店で婦人服を選び、美容や衛生を気遣い、文学全集を買い揃え、郊外の遊園地で遊び、少女歌劇を観るといったような、文化的で、アットホームで、清潔な生活も求められていた。このような都市の新しい家庭生活の形式は、新中間層の出現と呼応したものだ。戦時好況を経て衣食住への欲求がある程度満たされるようになる、新中間層のあいだでは教育や娯楽といった生活の **C** な部分にたいする関心、文化的な生活にたいする関心が高まっていったからである。その関心や欲求を生み出し、充足させていったのは、情報とコミュニケーションをめぐる新たなメディア技術と資本だった。そして、童謡もまた、都市新中間層を中心にして流行した都会の新風俗だったのである。

「現代」が胎動し、「新しい生き方」がモ **d** サクされる時代において、童謡という子ども文化が新たなメディア文化として消費され流行したという事実は、一九二〇年代のメディアと社会が子どもに決定的に重要な意味を見出していたことを物語るものである。おそらく、一九二〇年代とは、近代日本社会においてメディアと子どもという価値意識とが密接な関係を結んだ最初の時代なのであり、その関係とは、童謡のみならず近代日本社会におけるメディアの社会的形成のあり方そのものを指し示すものなのだ。

D 二〇世紀は、子どもの世紀だった。そのことを象徴するように一九〇〇（明治三三）年、E・ケイは『児童の世紀』という予言的なタイトルの書物を世に問い、日本においても大きな反響を呼んだ。実際、子どもは二〇世紀初頭において新しい生活とメディア文化が形成されるにあたって、決定的に重要な鍵となったのである。

かつてP・アリエスは、近代における「子ども」の誕生という事実を指摘した。近代に

おいて子どもは、「小さな大人」や労働力ではなく、大人とは異なる独自の存在であると思なされ、愛情の対象として捉えられるようになっていったのである。この事態を、アリエスは学校による教育の再編や「近代家族」の出現と関連付けながら明らかにしていった。近代日本において、アリエスの意味での「子ども」が誕生するきっかけとなったのは、都市新中間層の形成だった。しかも、「子ども」なるカテゴリーや知識が誕生したことは、もつと巨大な社会変動と社会意識の変容に即応したものだだった。

遠藤薫によれば、「子ども」の誕生とは、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての聖なる世界の世俗化と対応していた。伝統的な共同体の生活を律していた宗教的規範が衰退するなかで、世俗的な国民国家は人々を「国民」として再形成していく必要があった。そのため装置となり、国民国家の基礎単位としての機能を果たすようになっていったのが、家族である。そして、家族の要として位置付けられたのが「子ども」だった。遠藤は、「子ども」をめぐる世界認識上の 聖なるもの の位置の転回を以下のように説明している。

「近代における「子ども」の誕生とは」かつては、個人の外部に家族があり、家族の外部に共同体があり、共同体の外部に 聖なるもの（宗教）が存在するという秩序構造であったのに対し、家族が共同体から自律し、すなわち共同体によって規定されることをやめ、むしろ、家庭の内なる 子ども を焦点として結ばれる像となったことを意味している。いいかえれば、ことを意味しているのである。

近代における「子ども」は、伝統的な共同体がもつ秩序が解体し近代社会が成立していくプロセスのなかで、家族の中心に位置付けられ、聖なる価値を担うことになったのだ。それは、かつての伝統的な社会における宗教的な聖なる価値が、子どもへと転位していったことを意味するものだった。端的にいえば、子どもこそが、近代の大人にとっての「生きがい」となったのであり、親たちは我が子どものためなら「死ぬる」ようになったのである。

一九二〇年代の日本の社会変動は、村落部の伝統的な宗教的共同性を弱体化させた。都市化は従来の共同性を瓦解させ、都市部に一種のアノミー状態をもたらした。童謡の創作運動に関わった鈴木三重吉、北原白秋、野口雨情、中山晋平、草川信などもまた、故郷喪失を経験した若き都市漂流者たちの一部だった。とはいえ、既成宗教、階級、言語、人種、土着の文化などは、彼らのアイデンティティの拠り所とはなりえなかった。「ストレイシープ（迷える羊）」ともいうべき都市の不安定な漂流者たちにとって、新しい社会と「E 新しい生き方」を講究することは、じつに切なる課題であった。

都市の群像は、自らを社会的に包摂する超越性、世界観を開示し自らを救済する超越性を新たに必要としていたわけである。そのなかで生み出されたのが、子どもだった。子どもという聖なる存在は、天皇やマルクス主義などのように「シコウ」の価値を担いうる偶像となり、資本主義化する近代日本社会における「信仰」の対象のひとつになっていったのである。二〇世紀とはまさに、子どもが聖なる存在として位置付けられていった時代だったのだ。

周東美材「童謡の近代」より（一部省略した部分がある）

問 1 傍線部 a ～ e と同じ漢字を使っているものはどれか、それぞれ 〆 の中から一つずつ選びなさい。

a	1	ハイ棄	ハイ出	先パイ	ハイ面	惜ハイ
b	2	ケイ観	ケイ象	原ケイ	ケイ蒙	ケイ続
c	3	ソウ奪	ソウ敵	ソウ音	ソウ縦	ソウ上
d	4	サク品	サク視	軸サク	添サク	国サク
e	5	シ好	冬ジ	武シ	漢シ	導シ

問 2 空欄 A を補うものとして最も適当なものを次の 〆 のうちから一つ選びなさい。

- 自治会の役割の増加
- 少子高齢化社会の到来
- IT産業の躍進
- 伝統的な共同体の縮小
- 農業事業の整備及び促進

問3 傍線部B「都市の住民」とあるが、どのような人々のことか。その説明として最も適当なものを次の〃のうちから一つ選びなさい。 7

都市部に教育を受けにきて、そのまま都会で生活の基盤を作り上げた、地方出身者。都市部において教育を受け、頭脳労働によって俸給を手に入れるようになった者。地方から都市部に追いやられる形でたどりつき、生活を送るようになった者。都市部の中間層として生まれ育ち、エリートとして労働に携わる者。新中間層と呼ばれる社会階級に属し、手に入れた俸給で地方の活性化に貢献する者。

問4 空欄Cには二つの言葉が入る。最も適当なものを次の〃のうちから二つ選びなさい。(順序は問わない) 8・9

根本的  
逆説的

選択的  
随意的

論理的  
創造的

付随的

表面的

問5 傍線部D「二〇世紀は子どもの世紀だった」というのはなぜか。その説明として最も適当なものを次の〽のうちから一つ選びなさい。

10

大人とは異なる「子ども」という存在がやっと見直されることによって、新しい社会的規範が創造されたから。

国家を束ねる政治家にとつて、「子ども」の存在を中心に据えることが、いかに有効な策であるかが、しきりに論じられたから。

「子ども」のコントロールがまさしく家族をコントロールすることになり、ひいては国家の安泰につながるということが説かれた時代だったから。

これまでは大人を中心とした規範的な社会が主流であったが、結局それでは国家が安定することはなく、見直しが迫られたから。

世俗化に伴い、伝統的規範を失いつつあった国民国家がその立て直しの基礎として位置付けた家族の中心とされたのが「子ども」であったから。

問6 傍線部E「新しい生き方」についての筆者の考えとして最も適切なものを次の〽のうちから一つ選びなさい。

11

時代の変革とともに、全ての国民が追い求めねばならない大きな課題である。

世界大戦という大きな事柄を経た時代において、誰もが望んでやまない新しい価値観そのものである。

新しい時代の胎動に合わせて、新中間層に属する人々にとって追い求めねばならない姿である。

「子ども」という存在を考える上でどうしても必要とされた価値観である。郷里を離れた者達にとつて、また「子ども」達にとつても求めるべき必然の姿を

問 7 現したものである。  
児童文芸誌「赤い鳥」の創刊に携わった人物を次の 〆 のうちから一つ選びなさい。

12

芥川龍之介  
鈴木三重吉

柳田国男  
斎藤茂吉

太宰治

問 8 近代における「子ども」の存在を端的に言い表した表現を本文中から十二字で抜き出さなさい。別紙

問 9 3 ページ中央の空欄 〆 を次の二つの言葉を使い三十字程度で補いなさい。

別紙

聖なるもの ・ 子ども

(記号も一文字とする)

## 第2問

次の文章は、大谷哲夫の小説『永平の風』の一節である。後に日本仏教の一宗である曹洞宗の開祖となる禅僧：道元は真の仏法を求めて海を渡り、南宋の天童山で修行を始める。以下はそれに続く文章である。この文章を読んで後の問い（問1～問7）に答えよ。

それからしばらく経った真夏の日中のこと、道元が齋座（さいざ）（昼食）を済ませて東廊を通つて超然齋（ちようねんさい）という建物に行く途中、用（よう）という名の老典座（らうてんざ）が、仏殿の前で茸（きのこ）を天日に干している姿が目映った。

手には竹杖を持ち、頭には何も被っていない。雲ひとつない抜けるような青空。灼熱の太陽が容赦なく頭上から照りつけ、熱せられた石畳からは陽炎がたちのぼっていた。

老典座は、流れ落ちる汗にもかまわず、一心不乱に茸を干しているが、その表情はいかにも苦しそうであった。かなり高齢と見え、背骨は弓のように曲がり、長い眉毛は鶴の羽根のように白い。

道元は、苦しそうな様子を見かねて声をかけ、年齢を聞くと、六十八歳という。

これに驚いた道元が、

「暑いのに大変でしょう。どうして若い修行僧たちに命じて、させないのですか」

と訊くと、老典座は、

「他人は、私ではないではないか。人がやったことは自分のつとめにはならない。これは私の仕事なのだ」

と答えた。

「それは、よくわかります。ですが、どうしてこんな炎天下で苦しい思いをして、それを

する必要があるのですか」

「老典座は<sup>1</sup>怪訝ケツんそうに道元を見ながら言った。

「何をおっしゃる。さらに何れのときをか待たんじやよ。A 今このときを逃して、いった

いいつこの仕事ができるというのだ」

B 道元は返す言葉がなかった。沈黙する以外になかった。

椎茸を求めに船中を訪れた先の老典座といい、今、目の前で汗をたらして作業をしている老典座といい、名もない一介の僧までが修行の真の精神を守り、実践している姿に、自力<sup>注2</sup>弁道<sup>注2</sup>のかなめを見せつけられた思いと感動で、道元は胸を一杯にして廊下を歩み去った。

また、清貧に甘んじながら弁道に専念する僧に接したときも、同様の驚きと衝撃を受けた。

四川省出身のその僧は、驚いたことに日本では考えられない紙でできた衣を着ていた。そのため立ったり座ったりするたびに、妙な音がして衣が破れることがしばしばであったが、僧はそのようなことには一切かまわずに弁道に励んでいた。

ある人が見かねて質した。

「郷里に帰って、せめて衣服ぐらい整えてきてはどうですか」

「とんでもありません。私の郷里は遠いので往復の時間がもつたいない。大切な時間を無駄にしたくないのです」

僧はまるで気にかける様子もなく、その後も、以前にも増して弁道に励んでいた。

清貧といえ、他にもこのような僧がいた。

彼は、天童山の書記を務めていた道如上座と呼ばれる僧で、<sup>注3</sup>官人宰相の息子であった。

彼もまた、よれよれの衣服を身にまとい、<sup>注4</sup>行持は抜群で、徳望も名声も高かった。あるとき、道元は思いきって彼に訊いた。

「あなたは官人のご子息で、富貴の出身というのに、どうしてそのような粗末な衣をまとっているのですか」

すると、彼はこともなげに、きつぱりと応えた。

「私、僧だからです」

これには道元も返す言葉がなかった。なるほど、弁道はDそこまでの気構えをもって取り組まなければならぬのかと、このときも深く感銘を受けた。

当時の宋朝禅は、国家主義に迎合し、その道具でもあった儒教とも妥協していたが、天童山には、日本ではほとんど見ることができない、こうした

乙僧たちが多くいた。

3寸暇を惜しみ、艱難辛苦を厭わず、真実の仏法を求めてやまない真剣な求道者たちに接するたびに、道元の心はいやがうえにも高揚していった。

しかしながら一方で、「もつと勉強しなくては」という気持ちに常に駆られていた道元は、経典、祖録を読み漁っていた。

それまでずっと抱いてきた疑問は、まだ解決していない、それを、何とかしたいという一心で、これまで通りの学道修行の基本的な姿勢を崩さなかった。

注 1 典座……禅寺で、食事などの事をつかさどる役僧

注 2 弁道……仏道を一心に修行すること

注 3 官人宰相……朝廷の会議に参加する官吏

注 4 行持……仏道を常に怠らず修行すること

問 1 傍線部 1、3 の本文中の意味として最も適当なものを次の 1 から 5 のうちから

それぞれ一つずつえらべ。

13

15

1 怪訝んそうに

13

いかにも不満な様子で  
疑わしい様子で  
あきれ返った様子で  
軽蔑する様子で  
合点のゆかない様子で

2 目もあてられない

14

見るに忍びない  
直視できないほど立派な  
見るのが恥ずかしい  
誰なのか判別できない  
直視せざるを得ない

3 寸暇を惜しみ

15

苦痛を耐え忍び  
わずかな食物で満足し  
他者からの非難をものともせず  
わずかな暇も無駄にせず  
他の雑事に煩わされることなく

問2 傍線部A「今このときを逃して、いったいいつこの仕事ができるというのだ」とあるが、老典座はなぜこのように言うのか。理由として最も適当なものを次のくのうちから一つ選べ。16

茸を干す仕事はタイミングが重要で、それを間違えると失敗するから。

炎天下で苦しい思いをしなければ、本当の意味での修行とは言えないから。

この仕事は今ここにいる自分に与えられた、大切な修行の機会だから。

典座の仕事は専門性が高く、他の者には務まらないから。

仕事を他の者に譲れば、その者の修行にしなければならないから。

問3 傍線部B「道元は返す言葉がなかった」とあるが、なぜか。理由として最も適当なものを次のくのうちから一つ選べ。17

典座の仕事の重要さを深く理解したから。

仕事を独占する老典座の強欲さに呆れたから。

茸を干す仕事を簡単に考えていた自分を恥じたから。

老典座の仏道修行へのひたむきさに打たれたから。

苦しい仕事を続けようとする老典座を気の毒に思ったから。

問 4 傍線部C「私は、僧だからです」とあるが、どういうことか。内容として最も適当なものをおよそ2つ選べ。 18

粗末な衣こそ、僧にふさわしいのだということ。

仏道修行は、一般社会の富貴とは何の関係もないということ。

自分は一人の僧に過ぎず、官人宰相ではないということ。

官人の身分よりも、僧としての徳望や名声が重要だということ。

仏道修行は、僧でなければ出来ないのだということ。

問 5 傍線部D「そこまでの気構え」とあるが、どういうことか。内容として最も適当なものをおよそ2つ選べ。 19

修行に関係のないことは、自分から求めない覚悟。

たとえ富貴の家に生まれても、清貧を貫く覚悟。

困難にはむしろ積極的に立ち向かう覚悟。

修行のためには、あえて粗末な衣をも求める覚悟。

仏道修行にあたり、それ以外の全てを捨てる覚悟。

問 6 文章中の空欄  乙  に入れるのに最もふさわしい内容を次の  
一 つ選べ。 のうちから

道心堅固な  
文武両道の  
泰然自若の

天真爛漫な  
虚心坦懐な

問 7 右の文章のテーマを表現する上で最も適当と思われる四字熟語を次の  
うちから一 つ選べ。  の

融通無碍  
質実剛健  
明鏡止水

不撓不屈  
一意専心